

## 私の教育メモ

吉川 房枝（南山短期大学元教授）

「雪の下のタンポポ」と題する、薬物依存から立ち直った方の体験記を読んだことがあります。この方は薬がないと生きていけないようになって、自分の意志力ではどうにもならない、死ななければ自分は変わらないものと思っていました。北国の暗く寒い獄舎での出来ごとです。ある日の午後、薬物による症状で体が急に変調を来し、独房の天井がぐるぐる回って座っていることが出来ない程でした。思わず胸のポケットに隠してあった祈りのカードを取り出して、必死に何回も読み続けました。日が傾いて格子の窓の外を見てみると、雪の中に黄色いタンポポの花を見つけました。強い北風によって覆いの雪が吹き飛ばされて顔を出したのです。「その時は苦しみの最中であつたにもかかわらず、意味もなく何となく生きている自分が急に恥ずかしく思えたのでした。久し振りに戻ってきた感情と同時に、生きていくことの厳しさを神様が私に見せてくださったのだと思いました。それが私にとっての新しい生き方へのターニング・ポイントだったので。神様は塙の中に咲くタンポポを通して、生きる希望の道を教えてくださったのでした」と記されています。タンポポの花から厳しさの中に生きる希望の道を学んだということでしょうか。

植物、動物、あるいは無生物からさえも教えられて、人間が人格を高め形づくっていく例は、他にも沢山あげることができます。ところで、こういう自然の存在が本当に人間を教育するのでしょうか。このことは教育を一つの行為としてみる限り肯定できないと思います。行為は意図をもって何かをすることで、人格をもつ者にだけできます。教育は人に価値を育てようとする行為ですから、自然物にはできないということになります。私たちが言う「自然による教育」の現象をよく検討してみる時に、教育とは何かということが、はっきりしてくるように思います。

「雪の下のタンポポが生きる希望の道を教えた」という表現は文学では用い

られても、教育では用いられません。教育学の立場からこれを表現しようと思えば、「雪の下のタンポポによって、生きる希望の道が私に教えられた」という受け身の文章にしかできません。「タンポポによって」は「タンポポを通して」の意味です。「タンポポを通して生きる希望の道が私に教えられた」となります。これを「誰が誰に教える」という能動文にするならば、教える主語は誰なのでしょう。隠れている主語は「私」です。「私がタンポポを通して、生きる希望の道を私に教える」のです。教えられる私と同一の私が教えるのです。教育は、結局、教育される者の自己教育である、ということになります。

私たちは何かに、たとえばタンポポに、主観的な価値を選んで与えて発見し、その価値を通して自分を形成し教育しています。ここで主観的価値と言ったのは、同じタンポポを見ても、ある人は生きる道を、ある人は美しさを、ある人は根づよさを、というふうに、その学びとる価値は違うからです。人はその時の心の状態、主観的な精神構造に合ったものだけを選びとり、意味を与えます。科学者ニュートンが木から落ちるリンゴを見て万有引力の法則を発見したとすれば、それは偶然ではなくて、長い研究の積み重ねによるレディネスがあったからだと言われます。雪の下のタンポポを通して生きる希望の道を見つけた人は、もう駄目だと思ふ土壇場で、生きたいと必死になって祈っていた、その心の準備があったから、タンポポを見て、厳しさの中に希望をもって生きていくという主観的価値を自分で選びとったと思われまふ。そういうことはどうしてできるのか不思議なことだ。この人の記述には、「神様がタンポポを通して教えてくださったのでした」とありました。私たちの中には神の聖霊が働いています。その人が自己実現するために神が働かれます。人が聖霊の働きに敏感に応じるならば、その人の自己実現あるいは成長に最もふさわしい価値を発見するのだと思ひます。

教育はすべて教育される者の自己教育であるという観点からすると、普通に私たちが教育者と呼んでいる人も、決して教育する者ではありません。この人は教育の材料を与える役目を果たします。知識とか、人格とか、そういう価値を担っている何かを、教育される人の前に提示します。教育される人はこの材料にまず目をとめなければなりません。タンポポが咲いていても知らずに踏んでいく人もいます。まず目をとめて、選んだ主観的な価値を与え、それを発見して学びとるのです。これが教育という人格形成の行為であって、材料を与えるという行為は、教育の予備的行為であるに過ぎません。食べ物に人を提供するだけでは、その人は栄養をとって成長することになりません。その人が食べ物を食べて始めて成長します。また、人は自分で食べ物を見つけて食べて成長することができます。教育について言えば、いわゆる教育者がなくても被教育者さえあれば教育は成立するということだ。教育とは教育されることに他ならないと言えるでしょう。教育される人は、あらゆることを通して学ぶ可能性が有ります。



いわゆる教育者は、教育の材料を最も効果的に与えることによって、被教育者の自己教育が最も効果的に行なわれることに努める人です。自分が提供する材料から自分が期待する価値を被教育者が得てほしいと願います。この努力と期待は当然のものですが、被教育者が与えられた材料から何らかの価値を受けとるか否か、どんな価値を受けとるかに関して命じたり押しつけたりすることは、教育者の権限でもないし、その能力也没有ありません。教育者は、「こういうことを試してごらん」とまで言うことができます。

けれども、教育者というものは被教育者が今あるままでは満足せず、あるべき姿に向かって変化することを求めます。そして被教育者が可能性として持っている価値を意識するように助けることを使命としています。なぜなら価値可能性を意識してはじめて自己形成が成立するからです。その時、教育者は自分の思うようにではなく、その人と共に神の意志を求めていくという姿勢がなければなりません。価値の可能性の実現ということは、誰にとっても無限の課題であるので、教育者も被教育者も、この点では対等であると言えます。教育者が、ただ価値の可能性を一步先んじて意識しているということだけで、被教育者への尊敬を欠くようなことがあってはなりません。

教育を効果的にするためには、技術と方法が必要であることは言うまでもありません。被教育者が自発的に、与えられた材料に内在する価値を獲得するように働きかけることは最大の関心事となります。しかし、上から注ぎこみ、外から押しこむという仕方ではなく、教育される人の中に入ることによってだけ、それができます。大教育家ペスタロッチは、「私はただ子供たちと共にいた」と言っています。

教育者は教育の効果を目ざします。より高い価値を得させることを目ざします。しかしそれは他との比較によって評価されません。イエスは5タラントン預った者がもう5タラントンを儲け、2タラントン預った者がもう2タラントンを儲けたとき、全く同じように「よくやった」とおっしゃいました。ただ、1タラントン預ってそれを地の中に隠しておいた者からは、その1タラントンを取りあげてしまわれました。持っている可能性をフルに生かすことが教育の大事なのであつて、人と比べて上下を決めることではありません。その人がその人になるように望む、これが教育者の大事な姿勢なのです。

教育者は被教育者が自分を越えて行くことを望みます。教育される人は教育者が与える材料、その中にある価値を受けとることが大事なことです。教育者は、教育の材料を提供したからといって自分が相手にとって重要な人物になり、それによってある意味で相手を支配することは避けなければなりません。カウンセリングの心もそうです。カウンセラーは、来談者が自分を必要としなくなって、私は私で生きるんだと独立していくことが自分の喜びであるということです。人がその人として自分で生きていくことができるように助けていくというカウンセリングの心は、教育者の心でもあると思います。

教育者は自分が人を教育したり指導したりするには、あまりにも無力であると感じます。自分が学ばなければならないことが多いと感じます。それでも、この責任の重い仕事に、最後まで自分を与えさせるのは、聖霊による愛だと思っています。

この教育メモを終えるに当たり、私はあたりまえのことを書いてきたような気がします。このあたりまえのことが身についていない私です。自分で書いたことを再確認しながら、自分の生涯学習の課題としていきたいと思っています。

